

# 大学生の学問に対する課題価値が学習成果に及ぼす効果

13002PAM 松本 明日香

## 問 題

昨今、大学教育の質保証という観点から、学士課程教育の学習成果が求められるようになってきている（中央教育審議会，2012）。学習成果の中身は、専門的な知識・理解の側面と、どの分野にも共通な力であるジェネリックスキルの2つに分類することが可能であり、学習成果として専門分野ならではの固有性を内在したスキルの獲得が重要である（日本学術会議，2010）。学士課程教育の学習成果として重要な力の1つが思考力である（道田，2007）。道田（2011）は、大学生に必要な思考力として質問力と、質問することに対する姿勢である質問態度を取り上げている。本研究では、この質問力と質問態度を大学生の学習成果の一側面とみなす。さらに道田（2011）は、質問力は批判的思考の根本的要素であると述べているため、クリティカルシンキング志向性も思考力として取り上げる。加えて、学習成果の専門的な知識・理解に関する側面として、専攻学問をどのように学んでいるかという、学習への取り組み方にも着目する。

ところで、金子（2007）は大学生の大学教育に対する「かまえ」が学習成果の諸側面の獲得に重要であるとしており、その「かまえ」として課題価値に着目した。課題価値とは、学習者が学習内容にどのような価値を求めるのか、現在学んでいる学習にどのような価値評定をしているかという概念である（伊田，2001）。学習が将来の職業的な目標の達成に寄与するという価値づけである利用価値、学ぶことによって楽しさや充実感を得られるという価値である興味価値、学ぶことで望ましい自己像が獲得できるという価値づけである獲得価値が存在しており、獲得価値は獲得できる自己像が自分にとって望ましいか他人から見て望ましいかによって、私的獲得価値と公的獲得価値に分かれている。専

攻学問の学習を通じた学習成果の諸側面の獲得において、学問に対する課題価値は重要である。

## 研究1：目的

学問に対する課題価値が質問力、質問態度、クリティカルシンキング志向性、学習への取り組み方に及ぼす効果を検討する。

## 研究1：方法

**調査対象者** 大学3，4年生68名。

**質問力測定** 伊勢田ら（2013）の批判的思考力に関する教材の“地震の予知”から、1069字を抜き出し、文章題材を作成した。この文章題材を読んだ上で思いつく限りの質問、疑問を30分の制限時間内に記述するよう求めた。

**調査用紙の構成** 質問力測定後、調査用紙へ回答させた。①課題価値：伊田（2001）による30項目（7件法）。②クリティカルシンキング志向性：南（2013）による短縮版から、Non Social版16項目（検証の徹底，探究心，決断力，不偏性，脱軽信），Social版14項目（多様性理解・柔軟性，他者に対する真正性，論理的な理解，脱直感，脱軽信）（7件法）。③学習への取り組み方：Benesse教育研究開発センター（2008）による26項目（受講の基本的マナーの遵守，ディスカッション等への貢献，計画的・継続的自主学习，興味に基づいた自主学习，授業の予習・復習）（4件法）。④質問態度：道田（2011）による6項目（6件法）。

## 研究1：結果と考察

課題価値尺度は、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、4因子解（利用価値，興味価値，私的獲得価値，公的獲得価値）が得られた。学習への取り組み方も因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、3因子解（自発的学習・予習復習，集団学習における積極性，勤勉的受講態度）が得られた。質問力に関しては質問の数および質問の質を測定

するため、道田（2011）のカテゴリー表を参考に、記述された質問を“単純な説明を求める質問”，“思考を刺激する質問”，“意図不明な質問”に分類した。これら3種類の質問数の合計を質問総数とした。さらに、深い質問の生成率を求めるため、質問総数に占める思考を刺激する質問の比率を得点化した。課題価値と質問力、質問態度、クリティカルシンキング志向性、学習への取り組み方との関係を明らかにするため、相関分析を行った結果、公的獲得価値において事実を問う質問数との間に正の相関傾向が見られた ( $r=.230, p=.059$ )。また質問数と深い質問の比率を独立変数、課題価値を従属変数とした分散分析の結果、質問数が多く思考を刺激する質問の比率が少ないと、公的獲得価値が高かった ( $F(1,64)=4.968, p=.029, \eta_p^2=.072$ )。つまり、専攻学問の学びが他者から望ましいと認知されている自己像の獲得に繋がるという公的獲得価値は、質問生成数の多さとは関連するが、深い質問の生成とは関連しないことがわかった。伊田（2003）と同様に、公的獲得価値は単純に深い質問生成を阻害しているわけではないが、質問生成課題において、他者からの視点を気にしすぎることによって質問数を多く出すことに力を注ぎ、深い質問生成には至らなかったのかもしれない。次に利用価値と Non Social なクリティカルシンキング志向性の探究心の間には正の相関関係がみられた ( $r=.267, p=.028$ )。将来の目標と関連する価値である利用価値は、技術の習得や広範な知識の獲得を目指す志向性と関連があるため（鈴木・櫻井，2011）、類似した志向性である、興味を持った事に対して探究する姿勢である探究心と関連がみられたのかもしれない。そして重回帰分析の結果、公的獲得価値から学習への取り組み方である勤勉の受講態度へ負のパスが有意であった ( $\beta=-.347, p=.019$ )。公的獲得価値が高いと、他者から評価されにくい、基本的な学習マナー等は重視していない可能性がある。

## 研究2：目的

課題価値の向上支援は授業進行の工夫により実現できる可能性があるとされている（大谷，2013）。研究2では課題価値の規定因を探るた

め、専攻学問を学ぶことで身に付く力について考える授業によって、課題価値が刺激されるかを検討する。

## 研究2：方法

**調査対象者** (1) 授業前調査・授業後調査：心理学部の3年生201名。(2) 追跡調査：授業を受講した学生のうち、回答を承諾した128名。

**授業概要** 専攻学問を通じて獲得可能な社会人として必要な力を示し、学部教育とキャリアの関連を考えさせる授業を対象とした。授業前後、授業終了5カ月後に質問紙調査を行った。

**分析に用いた調査内容** ①課題価値：研究1と同様。②夏季のインターンシップ経験の有無。

## 研究2：結果と考察

授業実践とインターンシップ経験が課題価値に及ぼす影響を検討するために、調査時期とインターンシップ経験を独立変数、課題価値を従属変数とした2要因分散分析を行った結果、利用価値、興味価値、私的獲得価値で時期の主効果が有意であり、授業前よりも授業後のほうが課題価値得点が高かった ( $F(2,242)=36.569, p<.001, \eta_p^2=.232$ ;  $F(2,250)=2.585, p=.077, \eta_p^2=.020$ ;  $F(2,242)=9.825, p<.001, \eta_p^2=.075$ )。つまり、一時的ではあるが、授業実践によって課題価値が向上することが示された。

## 総合考察

課題価値が思考力、学習への取り組み方に及ぼす効果を検討した結果、4つの課題価値が及ぼす効果が学習成果の側面ごとに異なるものの、概して課題価値が学習成果の一部に影響を及ぼすことが示された。しかし、課題価値が学習成果に及ぼす効果は複雑であり、課題価値がある学習成果を媒介し、別の学習成果の獲得に影響を及ぼす可能性などもある。今後は、学習成果の概念関係を整理し、引き続き課題価値と学習成果の関係を詳細に検討する必要がある。また、授業実践による介入が課題価値に及ぼす効果を検討した結果、授業後には課題価値が向上したものの、利用価値、私的獲得価値では向上した価値得点が5カ月後には維持されていなかった。課題価値の定着には何が必要なのかについても、検討が必要だろう。